後拾遺和歌集

出典

▼底本

新日本古典文学大系「後拾遺和歌集」（久保田淳他校注、平成六〔一九九四〕年、岩波書店）によった。

▼成立・特徴

二十巻、約千二百十八首から成る。第四番目の勅撰和歌集。仮名序を有する。白河天皇の命により藤原通俊が撰進した。承保二（一〇七五）年下命、応徳三（一〇八六）年春に草稿本を作り、同年九月に撰進したが、すぐに改訂、翌年二月に再奏された。よって、成立の過程により草稿本・奏覧本・再奏本の三系統の本が発生している。撰者通俊が、同時代の源　経信や大江匡房に比べ歌人としての評価は高くなかったのに撰者に選ばれたことに、当時から疑問をもたれていた。経信も「難後拾遺」という書を著して、その撰歌を批判している。新たに誹諧歌・神祇・釈教の部立が設けられたが、誹諧歌の定義付けについても、やはり批判されている。撰歌範囲を「後撰集」以降当代までに限ったことで、和泉式部・赤染衛門ら王朝文化最盛期の歌人、相模のような女性歌人、能因ら僧侶の歌人を多く入集させることとなり、抒情性あふれる歌や贈答歌から清新な叙景歌まで、幅広い作風を展開している。古代から中世への転換点となる集とも言われる。

参考文献

❇教師用

▽注釈書

「後拾遺和歌集新釈」上・下　犬養廉他　笠間書院　平成八・九

「後拾遺和歌集」（岩波文庫）久保田淳・平田喜信　岩波書店　令一

▽入門書・研究案内・辞典

研究資料日本古典文学「和歌」大曾根章介他編　明治書院　昭五十八

「【うた】をよむ一三十一字の詩学」小林幸夫他　三省堂　平九

「和歌大辞典」犬養廉他編　明治書院　昭六十一

「歌ことば歌枕大辞典」久保田淳他編　角川書店　平十一

「歌枕歌ことば辞典　増訂版」片桐洋一　笠間書院　平十一

「名歌名句大事典」久保田淳・長島弘明編　明治書院　平二十四

❇生徒用

「和歌文学の基礎知識」（角川選書）谷知子　角川学芸出版　平十八

「和歌とは何か」（岩波新書）渡部泰明　岩波書店　平二十一

「古典和歌入門」（岩波ジュニア新書）渡部泰明

「和歌のルール」渡部泰明編

岩波書店　平二十六
笠間書院　平二十六

図版解説

〈和泉式部〉

個人蔵。佐多芳郎（一九三一―一九九七）画。東京都生。安田靫彦に師事し歴史画を学ぶ。大仏次郎や山田周五郎などの作品の挿絵を多数描いた。

⇩ P 263

品詞分解と現代語訳

（表示は略号で示した。略号については略号一覧参照。）

男	に	忘ら	れ	て	侍り	ける	頃、	貴船	に	参り	て、	御手洗川	に
格助・受対		ラ四・未		受・用	接助・単接	補動・ラ変・用（丁）撰者→読者	過・体	格助・帰着		ラ変・用	接助・単接	格助・場所	

和泉式部	の	蛍	の	飛び	侍り	ける	を	見	て	詠め	る
	格助・主格		格助・体修	バ四・用	補動・ラ変・用（丁）撰者→読者	過・体	格助・対象	マ上一・用	接助・単接	マ四・已	完・体

もの思へ	ば	沢	の	蛍	も	我	が	身	より	あくがれ出づる	魂	か	と	ぞ
八四・已	接助・順偶		格助・体修		係助・強意	代	格助・体修		格助・起点	ダ下二・体		係助・疑問	格助・引用	係助・強意（係）

見る
マ上一・体（結）

男に忘れられていました頃、貴船神社に参詣して、御手洗川に蛍が飛んでいましたのを見て詠んだ（歌）

思い悩んでいると、沢の蛍も我が身から抜け出した魂ではないかと（思って）見ることです。

（巻二十・雑六・一一六二）

《主題》

夫にかえりみられなくなった我が身のうちにどうしようもなくくすぶり続ける思いが、その我が身から抜け出ていくのではないか、とさえ思う、と神に訴えかけた歌。

指導上の注意点と発問例

●二六二ページ

問　作者はここでの蛍をどのようなものと見ているか。

語句の研究

●二六二ページ

4 男に忘られて　「男に忘れられて」。「俊頼髄脳」に「和泉式部が保昌に忘られて貴舟に参りて詠める」とあるのに従えば、二度目の夫である藤原保昌にかえりみられなくなったことをいうことになるが、復縁を願った相手としては最初の夫の橘道貞の方がふさわしいとする説もある。

4 貴船　現在の京都市左京区鞍馬貴船町にある貴船神社。

5 御手洗川　神社に参拝する前に身を清めるための神前の川。この歌でも貴船神社の御手洗川をいうように、もとは特定の神社の川を指すものではなかったが、賀茂社や春日社で詠まれることが多く、とりわけ賀茂社の御手洗川が歌枕として固定化していった。

7 もの思へば　「思い悩んでいると」。「もの思ふ」は、「思いにふける、思い悩む」の意。当該歌では、夫にかえりみられること

補 答 もの思う自分の身体から抜け出した魂。蛍を魂に見立てる発想は、「伊勢物語」四十五段の「ゆく蛍雲の上までいぬべくは秋風吹くと雁につげこせ」などにも見える。

のなくなってしまった寂しさが起点となっていると考えられる。このような、ひとりある個の思いが、心に満ち、やがて自然と共鳴し、交感するというあり方は平安時代以降非常に好まれ、自然と渾然一体化したそうした物思いの極致こそが当該歌であるという見解もある（「歌ことば歌枕大辞典」）。

7 沢の蛍　沢の（あたりを飛んでいる）蛍。蛍は恋の思いとともに詠まれることも多く、その光はまさしく燃える恋心の象徴ともなり得る。ここでのもの思いも、まずは詞書の「男」に対する思い、執着を起点とすると考えておく。

7〜8 あくがれ出づる魂　体から抜け出した魂。「あくがる」は、「心」や「魂」が花や月などの景物や恋しい思いに引かれ、本来の場所であるべき「身」を離れてさまよい出ることをいう。人の魂は思い詰めると体から抜け出すものであると把握されていた。「思ひあまり出でにし魂のあるならむ夜深く見えば魂結びせよ」（伊勢物語・百十段）や、「源氏物語」の六条御息所の生き霊が、「もの思ふ人の魂はげにあくがるるものになむありける」などと評されるのはその典型。

作者

和泉式部

生没年未詳。越前守大江雅致の娘。長保元（九九）年頃、和泉守橘道貞と結婚して小式部内侍を儲けたが、冷泉天皇の第三皇子為尊親王と恋愛関係になり、長保四（一〇〇二）年六月十三日の親王の薨去後、翌年初夏の頃、弟宮敦道親王と恋におちる。その間の事情は「和泉式部日記」に詳しい。しかし、寛弘四（一〇〇七）年十月二日、敦道親王も薨去。その後、寛弘六（一〇〇九）年の葵祭りの頃、中宮彰子の女房として出仕。紫式部より二、三歳年下ではないかと言われる。

鑑賞

魂が体からさまよい出てしまう、というのは和歌の世界でも古くから詠まれてきており、その時代の人々の身体感覚や霊魂観を知る上でも参考になる。

また、当該歌は神前で自らの晴れぬもの思いの深刻さを訴えたかたちであるが、この歌を収める「後拾遺集」では直後に、

奥山にたぎりて落つる滝つ瀬のたまちるばかりものな思ひそ

この歌は貴舟の明神の御返しなり、男の声にて和泉式部が耳に聞こえけるとなんいひ伝えたる

の歌が続く。左注が伝えるのは、当該歌での和泉式部の訴えは神

に届き、（状況は好転するから）それほどまでに思い詰めてはいけない、と諭した歌（神詠）が返されたという逸話である。「俊頼髄脳」「無名草子」「古今著聞集」「沙石集」など多くの書に引かれ、共有された説話である。

もとより和歌は、天皇と一般庶民との間でも言葉を交わすことの許される特別な表現形式であった。ここでも貴船明神との間に対話を成立させるのは和歌の力に他ならない。和泉式部の切実な思いが、「古今集仮名序」のことば通り、「目に見えぬ鬼神」をも動かしたということになるのだろう。

新古今和歌集

出典

▼底本

新編日本古典文学全集「新古今和歌集」（峯村文人校注、平成七〔一九九五〕年、小学館刊）によった。

▼成立

二十巻、約千九百八十首からなる、第八番目の勅撰和歌集（八代集の最後）。後鳥羽院の下命を受けて、源通具・藤原有家・藤原定家・藤原家隆・藤原雅経が撰進した。寂蓮も下命されたが、編集途上の建仁二（一二〇二）年に没したので撰者には含めない。成立過程は四期に分けられる。第一期は建仁元年十一月の下命から、同三年四月までで、撰者たちが候補作を提出した時期。第二期は元久元（一二〇四）年六月までで、その候補作を後鳥羽院自らが手を下して精選した時期。第三期は元久二年三月二十六日までで、院の精選した和歌を、撰者たちが部類し完成させた時期。第四期は建保四（一二一六）年十二月頃までで、いったんは完成したはずの集に対し、改訂作業が続けられた時期である。かつてない勅撰和歌集を作り上げようとする、後鳥羽院の執念と行動力が如実にうかがわれる。それは、古代の理想社会を今に再生しようとする情熱である。古歌や物語を踏まえる本歌取りの技法は、表現におけるその端的な表れといえよう。

参考文献

❇教師用

▽注釈書

新日本古典文学大系「新古今和歌集」　田中裕他　岩波書店　平四

新編日本古典文学全集「新古今和歌集」　峯村文人　小学館　平七

新潮日本古典集成「新古今和歌集」　久保田淳　新潮社　昭五十四

「完本新古今和歌集評釈」　窪田空穂　東京堂　昭三十九〜四十

「新古今和歌集全注釈」　久保田淳　角川学芸出版　平成二十三〜二十四

▽入門書・研究案内・辞典

鑑賞日本古典文学「新古今和歌集　山家集　金槐和歌集」　有吉保他　角川書店　昭五十二

鑑賞日本の古典「新古今和歌集　山家集　金槐和歌集」　有吉保他　尚学図書　昭五十五

研究資料日本古典文学「和歌」　大曾根章介他編　明治書院　昭五十八

「【うた】をよむ一三十一字の詩学」　小林幸夫他　三省堂　平九

「和歌大辞典」　犬養廉他編　明治書院　昭六十一

「歌ことば歌枕大辞典」　久保田淳他編　角川書店　平十一
「歌枕歌ことば辞典　増訂版」　片桐洋一　笠間書院　平十一
「新古今和歌集入門」（有斐閣新書）上條彰次他　有斐閣　昭五十三
「西行山家集入門」（有斐閣新書）久保田淳　有斐閣　昭五十三
「名歌名句大事典」　久保田淳・長島弘明編　明治書院　平二十四
「和歌文学大辞典」　古典ライブラリー　平二十六

※ **生徒用**

新潮古典文学アルバム「新古今和歌集・山家集・金槐和歌集」　佐藤恒雄他　新潮社　平二
「和歌文学の基礎知識」（角川選書）谷知子　角川学芸出版　平十八
「新古今和歌集」（角川ソフィア文庫）久保田淳　角川学芸出版　平十九
「新古今和歌集」（角川ソフィア文庫　ビギナーズ・クラシックス）小林大輔　角川学芸出版　平十九
「和歌とは何か」（岩波新書）渡部泰明　岩波書店　平二十一
「古典和歌入門」（岩波ジュニア新書）渡部泰明　岩波書店　平二十六
「和歌のルール」　渡部泰明編　笠間書院　平二十六

図版解説　〈新三十六歌仙画帖〉

フェリス女学院大学付属図書館蔵。江戸時代前期（一七世紀）。絹本金銀泥彩色画。狩野洞雲（益信　一六三五―一六九四）画。「新三十六歌仙画帖」は後鳥羽院が撰んだと言われる歌仙を描き、表に絵色紙、裏に詞色紙を貼付している。裏の詞色紙の和歌は「左　前中納言定家／しら玉のをだえのはしの名もつらしみだれてをつる袖のなみだに」。⇩ P 263

品詞分解と現代語訳

（表示は略号で示した。略号については略号一覧参照。）

男ども　詩を　作りて　歌に　合はせ　侍り　しに、　水郷の　春望
格助・対象　ラ四・用　接助・単接　格助・対象　サ下二・用　補動・ラ変・用（丁）撰者→読者　過・体　格助・時間　格助・体修

と　いふ　こと　を
格助・引用　八四・体　格助・対象

見渡せ　ば　山もと　霞む　水無瀬川　夕べ　は　秋と　なに　思ひ　けむ　（巻一・春上・三六）
サ四・已　接助・順偶　マ四・体　係助・区別　格助・引用　副　八四・用　過原推・体

近臣たちが漢詩を作って和歌に合わせましたときに、「水郷春望」という題を（詠んだ歌）
はるかに見渡すと、山の麓に霞がかかって、（そこに）水無瀬川が流れている。夕暮れ（のすばらしい季節）は秋だと、どうして思い込んでいたのだろう（この春の夕暮れも、すばらしいではないか）。

《主題》
水無瀬の春の夕暮れに、新たな美を発見した喜びを詠んだ歌。

指導上の注意点と発問例

●二六二ページ

問「**夕べ**」とは、**具体的に何を意味しているか。**

答 夕暮れの景色の趣

問「**夕べは秋となに思ひけむ**」（**12行目**）とは、**どのような気持ちか。**

答 春の夕暮れもすばらしいではないかという気持ち。

語句の研究

●二六二ページ

11男ども　「をのこ」は殿上人もしくは蔵人をいい、ここでは後鳥羽上皇に仕える臣下たちを指す。

11詩を作りて…侍りしに　元久二（一二〇五）年六月の後鳥羽上皇主催の「元久詩歌合」での作。「詩歌合」とは、漢詩と和歌を番わせるかたちで享受するもので、その形式は藤原良経によって確立されたとされている。このときも、そもそもの企画者は良経であり、後になって後鳥羽上皇の主催となったことで大規模なものとなり、結果として以後の歌壇に規範として踏襲されていった。なお、詩歌合では、後鳥羽上皇の帝時代に侍読（学問の教授）であった藤原親経の「湖南湖北山千里。潮去潮来浪幾重」と合わされた。

11水郷の春望　「水郷春望」とは「水辺の里の春の眺望」という意味の題。ちなみに「元久詩歌合」は「山路秋行」との二題で催されている。

12見渡せば　「はるかに見渡すと」「遠く広く

補 夕暮れの情趣は秋がすばらしい、と思い込んでいた今までの自分の価値観をいぶかしみ、既成の王朝的美意識に異を唱えると同時に、水無瀬の夕景に新たな美（春の夕暮れのすばらしさ）を発見した喜びである。この歌の前提にある「夕べは秋」という認識を「枕草子」の「春はあけぼの」などで確認したい。後鳥羽上皇は同様に「枕草子」を念頭に置いた歌、「曙をなにあはれとも思ひけむ春暮るる日の西の山かげ」（正治二年「院初度百首」）などをすでに詠んでおり、歌壇の中心者として、新しい美を発見していこうという意欲が感じられる。

問 **作者は、どのような情景に感動してこの歌を詠んでいるのか。**

答 遠くの山の麓のあたりがかすみ、近くには水無瀬川が流れている情景。

問 **この歌の新鮮味はどのような点にあるか。**

答 古来、秋こそが夕暮れの趣深い季節とされてきたのに対して、春の夕景色の趣を発見し、賞賛している点。

見やると」。水無瀬離宮（「水無瀬川」の項目参照）からの遠望か。「渡す」は「広く…する」の意を添える補助動詞。

12 山もと霞む　山の麓に霞がかかって。「山もと」は山の麓。山の位置は水無瀬川左岸、淀川左岸、淀川対岸など諸説ある。

12 水無瀬川　「水無瀬川」は現在の大阪府三島郡島本町を流れ、淀川に注ぐ川で、摂津の国の歌枕。川の南に後鳥羽上皇が愛した水無瀬離宮があり、歌合や歌会などが催された。なお「万葉集」の「水無瀬川」は、本来「水の無い（見えない）川」の意の普通名詞。

12 夕べは秋　夕暮れの情趣は秋がすばらしい、という価値観は「枕草子」の「秋は夕暮れ」に代表される美意識だった。

12 なに思ひけむ　「どうして思っていたのだろう」。「なに」は疑問の副詞で、「けむ」は過去の原因推量。副詞「なに」と呼応して連体形（係助詞以外でも、文中に疑問や反語の意を持つ語があるときは、連体形で結ぶ）。夕暮れの情趣は秋に極まると思っていた今までの価値観（既成の王朝的美意識）をいぶかしむことで、春の水無瀬の夕景を前に、春の夕暮れもすばらしいではないか、と新たな美を発見した喜びの表現。

作者

後鳥羽上皇

治承四（一一八〇）年～延応元（一二三九）年。第八十二代天皇。高倉天皇四宮。母は修理大夫藤原信隆の娘殖子（七条院）。寿永二（一一八三）年七月の平家都落ちの際、平家と同行した安徳天皇に代わり、神器がないまま践祚した。建久九（一一九八）年、十九歳にして土御門に譲位して院政を開始、同時に和歌に熱意を示し始める。院を中心とした歌壇は盛況を極め、多くの和歌行事の開催や和歌所の開設といった業績を残し、その成果は「新古今和歌集」に結実した。承久三（一二二一）年、承久の乱を起こすもすぐに敗退、北条氏によって隠岐に流されて同地で没した。「新古今和歌集」の代表歌人であるとともに、歴代の皇室歌人の中でも傑出した存在である。家集に「後鳥羽院御集」、歌論に「後鳥羽院御口伝」。「新古今和歌集」には「太上天皇」として三四首入集。

鑑賞

「枕草子」などに見られる「秋は夕べ」という通念が前提となった歌である。上の句の叙景、下の句の抒情という歌の構成や発想は、古注以来、藤原清輔の「薄霧の籬の花の朝じめり秋は夕べとたれかいひけむ」（「新古今和歌集」秋上）と比較されてきた。清輔の歌も、眼前の光景から、今までの美意識を疑うという実感を詠んだ歌であるが、「たれかいひけむ」という結句は後鳥羽上皇の歌に比べるとやや客観的と言えよう。「水無瀬」という地名や、「なに思ひけむ」という内省の中に、こよなく愛した水無瀬への思いや、新たな美を発見していこうという気概が感じられる。

〈参考〉「枕草子」

秋は夕暮れ。夕日のさして山の端いと近うなりたるに、烏の、寝所へ行くとて、三つ四つ、二つ三つなど飛び急ぐさへあはれなり。まいて、雁などの連ねたるが、いと小さく見ゆるは、いとをかし。日入り果てて、風の音、虫の音など、はた言ふべきにあらず。

品詞分解と現代語訳

（表示は略号で示した。略号については略号一覧参照。）

宮内卿

千五百番歌合　に、　春歌
　　格助・時間

薄く　濃き　野辺　の　緑　の　若草　に　跡　まで　見ゆる　雪　の　むら消え
形ク・用　形ク・体　　格助・体修　格助・体修　格助・理由　副助・限度　ヤ下二・体　格助・体修

（巻一・春上・七六）

千五百番歌合のときに（詠んだ）、春の歌

薄いのも濃いのもある野辺の緑の若草によって、その跡までもが分かることだ。雪が（あるいは早く、あるいは遅く）解け消えていった、一様ではなかったその様子が。

《主題》

春の若草の緑の濃淡から雪解けの遅速を見てとった機知に富んだ歌。

指導上の注意点と発問例

●二六三ページ

問 **作者の宮内卿とは、どのような人物か。**

後鳥羽上皇の女房として出仕していた歌人。

問 答 **この歌は、「古今和歌集」の「緑なるひとつ草とぞ（　①　）は見し（　②　）はいろいろの花にぞありける」を下敷きにしているとされるが、（　　）に入る季節をそれぞれ答えよ。**

語句の研究

●二六三ページ

1千五百番歌合　建仁二（一二〇二）年～三年に行われた、後鳥羽上皇主催の史上最大の歌合。当時の代表的歌人三十名が百首ずつ歌を提出して成った。ただし歌合は実際に行われたのではなく、歌が机上で合わされたもの。判（判定）には判詞を詩句や和歌で記した判詩や判歌などユニークな形式が見られる。「新古今和歌集」撰進へ向けて動いている後鳥羽上皇歌壇の記念碑的行事で、「新古今和歌集」にはここから九十一首が入集している。この歌はそのうち百二十番左で勝ちを得ている。

2薄く濃き　「薄いのも濃いのも」。直接的には「緑」に掛かり、生え揃っているか否かなどで、見た目に映る若草の緑が同じ一つの色ではないことをいう。この歌は「緑なるひとつ草とぞ春は見し秋はいろいろの花にぞありける」（「古今和歌集」巻四・よみ人知らず）が下敷きになっていると考えられており（これを「本歌」とする説もある）、春の緑もまた一色ではないと見ると

答　①春　②秋

問 ◉**「跡まで見ゆる」（2行目）とあるが、何の跡が、何によって分かるのか。**

答　雪が早く解けたか遅く解けたか（を示す形跡）が、若草の緑の濃さや薄さによって分かる。

補　跡とあるが、作中の主体の、もしくは作品の世界を享受する我々の眼前にあるのは、野辺に生え初めた若草の緑色が一様でなく、ところどころ薄かったり濃かったりしていることのみであることに注意したい。そこに形あるものとしてはまるで見えていない季節の推移が、ささやかな事実に着目した瞬間に、リアルな景としてありありと立ち上がってくる、その不思議さにこそ、この歌の獲得し得た表現の妙があることを理解させたい。

問 **「まで」を文法的に説明せよ。**

答　限度を表す副助詞

問 **「むら消え」とは本来どのような状態を言う語か説明せよ。**

答　まだらに消えるという意味であり、逆に言えばまだらに残っているということでもある。

ころに新しさがある。先に見た後鳥羽上皇の歌のように、古典的な通念や把握を乗りこえた新たな美の発見を企図したものと考えることもできる。

2若草　芽を出して間もない早春の草。残雪との対比などによって、みずみずしい緑を詠むものが多い。一方で、「春日野はけふはな焼きそわか草のつまもこもれり我もこもれり」（「古今和歌集」春・よみ人知らず）のように、「若草の」という形で「つま」や「にひ」などに掛かる枕詞としての用法もあるように、若い女性のイメージとも重ねられる景物である。夭折した宮内卿は、永遠に「若草の宮内卿」のままである。

2跡まで見ゆる　「跡が見て取れる」。「見ゆる」は語源的にはマ行上一段活用動詞の「見る」に、上代の自発・可能・受身の助動詞「ゆ」が付いたものとも言われているが、ヤ行下二段活用「見ゆ」の連体形と把握する。

上代（奈良時代）の助動詞「ゆ」の活用

四段・ナ変・ラ変の未然形に付く。

未然	連用	終止	連体	已然	命令
え	え	ゆ	ゆる	ゆれ	○

ここは「自発」で、「目に映る」「見える」の意であるが、「可能」の要素が強い。春が訪れ、雪の痕跡はもう何処にも残ってはいないのであるが、若草の緑の濃淡によって、緑の濃い部分は雪が早く解け、緑の薄い部分は比較的遅くまで雪が残っていたのだろうと推量し、その跡をはっきりと見て取れると詠んでみせるのである。

2むら消え　斑に消えることであるが、それはすなわち斑に残ることでもあって、普通は消え残っているもののほうに重点を置いて使う語。雪である場合が圧倒的に多く、ほかに霧や霞などの例がある（「歌ことば歌枕大辞典」）。ただし、この歌においては雪が一部に残っているような景を想起しては興醒めなのかもしれない。ここでの雪は、若草の緑の僅かな違いに改めて注視することによって初めて視線の先に〈幻視〉されるもののはずである。

作者

宮内卿

生没年未詳。文治元（一一八五）年頃生まれ、元久元（一二〇四）年もしくは同二（一二〇五）年頃、二十歳くらいで没したか。鎌倉初期の女流歌人。父は源師光で、兄、具親とともに歌人。後鳥羽院の女房で、若くしてその歌才を見出され活躍したが、「新古今和歌集」の完成を待たずに世を去ったと思われる。「無名抄」は作歌に熱中したあまり病を得たと伝える。「薄く濃き」（六一・5）の歌で若草の宮内卿と呼ばれた。

鑑賞

作者に天才少女「若草の宮内卿」の名声を与えた一首である。出典である『千五百番歌合』について語る『増鏡』第一「おどろのした」も、多くの名歌のなかから特別に当該歌を引いて「去年の古雪の遅く早く消えける程を推し量りたる心ばへ」であるとの解説まで加えて彼女の早世を惜しんでいる。

久保田淳『新古今和歌集全注釈』なども指摘するように、正治三（一二〇一）年正月の『影供歌合』での藤原有家の作、

山陰やさらでは庭に跡もなし春ぞ来にける雪のむら消え

（新古今和歌集・雑歌上・一四三七）

から着想を得ていて、必ずしも彼女の独創によるとは言い難い作であるのかも知れないし、窪田空穂らが「理知的に過ぎる」と評しているのも故無しとは言えない。ただ、眼前にない雪の消えていく様子までも幻視させる一首としての達成は紛れもなく新古今的であり、広く人口に膾炙して彼女の代名詞となった作である。後世の指摘や批判はこ歌の価値を少しも貶めるものではない。

品詞分解と現代語訳

題知ら　ず
打・終

誰か　また　花橘に　思ひ出で　む　我も　昔の　人と　なり　な　ば
係助・疑問（係）　副　格助・理由　ダ下二・未　推・体（結）　係助・同類　格助・体修　格助・変化　ラ四・用　完・未　接助　順仮

（表示は略号で示した。略号については略号一覧参照。）

藤原俊成

（巻三・夏・二三八）

作歌事情は不明

誰がまた花橘の香りから（今の私がしているのと同じように、私のことを）思い出すだろうか。私も世を去って昔の人となってしまったならば。

《主題》

人は花橘につけて懐旧し、故人を偲んで歌にも詠むが、自分もそうして偲ばれることがあるだろうかと想像した歌。

指導上の注意点と発問例

●二六三ページ

問「**思ひ出でむ**」（**4行目**）**とあるが、誰が何を思い出すのか。**

補 **答**（私の死後に）誰かが私のことを。

「昔の人」が故人を指すとなれば、「私」が「昔の人」になるのはもちろん「私」が死んでからのことになる。さっきまで故人とともに歌を詠んでいた人が、自分が死んでからのことを思い出すだろうかと想像しているのである。

語句の研究

●二六三ページ

4 誰かまた…思ひ出でむ　二六一ページ「古今和歌集」「五月待つ」の歌の本歌取り。（今の私がしているのと同じように、私のことを）「誰がまた…思い出すだろうか」。「か」は疑問の係助詞、「む」はそれを受けて推量の助動詞の連体形であり、ここで三句切れになる。反語と解する説もあり、その場合は作中の主体に「思い出されることはない」という確信が必要になるはずであるが決め手を欠いており、ここでは疑問と解しておく。「五月待つ」の歌のように、橘の花の香りによって、親しく交際していた人、この場合は作者自身を想起することをいう。

4 花橘　先に見た「古今和歌集」の「五月待つ」（二六一・2〜3）の歌は、人口に膾炙するのみならず、後に、かつての知人を思い出したり、昔そのものを思い起こさせることの契機となる定型表現となった。この歌もその型を踏まえた本歌取りである（俊成の家集「長秋詠藻」によれば「はな

なった人のことを想起し、過去のどこかにひたっていた自分がふと我に返って、自分もいずれ世を去り、そんな風に誰かに偲ばれる日が来るだろうか、と考える。その転換とそれに伴う心の動きを詠んだ歌なのだろう。自分にはそんな人はいないのではないか、といった不安なり絶望を抱えている主体でなければ歌にならない、ということでもないはずである。「また」と「も」に注意して、一首の表現意図を正確につかみたい。

問 **この歌の本歌を答えよ。**

答 五月待つ花橘の香をかげば昔の人の袖の香ぞする

問 **「思ひ出でむ」の「む」を文法的に説明せよ。**

答 推量の助動詞の連体形

問 **「昔の人」とは、どのような人か。**

答 故人

補 語句の研究参照。

問 **「なりなば」の「な」を文法的に説明せよ。**

答 完了の助動詞「ぬ」の未然形

たち花を人々よみけるに」の詞書から「花橘」の題詠らしい。「また」とある以上、ここで主体自身が花橘の香りから何らかの懐旧の営みを為していることになる。

4 我も昔の人となりなば　「私もまた世を去って昔の人となってしまったならば」。「なば」は、完了の助動詞「ぬ」の未然形に、順接仮定条件の接続助詞「ば」が付いたもの。「昔の人」は、本歌「五月待つ」（二六一・2〜3）においては昔交際していた恋人のことであるが、「我も」とあるのでその意味はとりにくい。かつての恋人のことを今まさに思い出していながら、現在交際している人に（これから先別れた後で）かつての恋人として思い出されるのを想像することになってしまうからである。父の家集を紐解きながら亡き父を思い出す壬生忠見の「ことのはの中をなくなくたづぬれば昔の人にあひみつるかな」（「新古今和歌集」・巻十八）や、信西の妻の死に際して西行の詠んだ「船岡の裾野の塚の数添へて昔の人に君をなしつる」（「山家集」中・雑）のように、「故人」の意味で解すべきであろう。自分の死後、自分のことを思い出して偲んでくれる人がいるだろうか、と想像している一首なのである。

作者

藤原俊成

永久二（一一四）年～元久元（一二〇四）年。名はしばしば「しゅんぜい」と音読される。中古三十六歌仙の一人。藤原俊忠男。崇徳天皇の愛顧を受けて歌人的立場を得、多くの歌合の判者となるなどの実績を積み、歌界の第一人者となる。哀感のこもった抒情を、優美な表現で歌うことを得意とした。「千載和歌集」の撰者を務め、その後も新古今歌人たちの指導的役割を果たした。藤原定家の父。家集に「長秋詠藻」、歌論に「古来風体抄」（式子内親王に献呈か）などがある。

鑑賞

「古今和歌集」「五月待つ」の歌をふまえて、いま、自分が花橘の香りから懐旧に浸っている現在が、自分の死後に遠い過去として何者かによって思い出されるようなことがあろうか、というのであるが、過去をふまえて未来からの懐旧を現在時に想像するという点で、ライバルである藤原清輔の、『百人一首』にも採られた、

ながらへばまたこのごろやしのばれむ憂しと見し世ぞ今は恋しき

と比べてみたくなる。自身の抱えたつらさや苦しさを懐かしく思い出すのが現在も未来も作者自身である清輔の歌に対し、当該歌においては現在の懐旧が本歌取りによって行われているからには（「私が古歌に詠まれた人のように昔の人を思い出しているように」というわけであるから）、懐旧するのは、過去・現在・未来それぞれ別の人であることになる。しかも、その営為を媒介するのは、「五月待つ」の歌と、「五月待つ」をふまえた当該歌であることになる。清輔のそれが未来への希望であったように、当該歌もまた、古歌のみならず、古歌をふまえて新歌を詠み出す行為までもが世代を超えて受け継がれていくであろうことの予祝でさえあったのかもしれない。仮にそうであるなら、初句の係助詞「か」は、やはり反語であってはならないのである。

品詞分解と現代語訳

（表示は略号で示した。略号については略号一覧参照。）

藤原定家

西行法師　勧め　て、　百首歌　詠ま　せ　侍り　ける　に
マ下二・用　接助・単接　マ四・未　使・用　補動・ラ変・用（丁）　過・体　格助・時間

見渡せ　ば　花　も　紅葉　も　なかり　けり　浦　の　苦屋　の　秋　の　夕暮れ
サ四・已　接助・順偶　係助・列挙　係助・列挙　形ク・用　詠・終　格助・体修　格助・体修　格助・体修

撰者→読者

（巻四・秋上・三六三）

西行法師が勧進して、百首歌を詠ませましたときに（詠んだ歌）
見渡してみると、花も紅葉も（美しいものは）何もないのだなあ。（それがまた趣深いよ。）この浦の苦屋から見る秋の夕暮れの光景は。

《主題》
花も紅葉も美しいものは何もない、わびしげであわれ深い、秋の海辺の夕暮れ時の光景を詠んだ歌。

指導上の注意点と発問例

●二六三ページ

問 **何句切れの歌か。**

答 三句切れ

問 **「なかりけり」の「けり」を文法的に説明せよ。**

答 詠嘆（気づき）の助動詞「けり」の終止形

問 **(1)「花も紅葉もなかりけり」（6行目）とは、どのような心情を表そうとしたものか。**

答 (1)美しいものは何もないが、それがかえって趣深いという心情。(2)「なかりけり」という言葉で存在を否定しても「花」「紅葉」のイメージはこの語が発せられた瞬間に残像として脳裏に定着する。その華やかなイメージが、かえって「浦の苦屋の秋の夕暮れ」のもの寂しい雰囲気を強調するという効果を持つ。

(2)この表現には、この歌のイメージを捉えるうえで、どのような効果があると考えられるか。

補 春の花と秋の紅葉とは、四季折々の美しい景物の中でも、最も美しいとされるもの。つまり美的景物の代表である。すなわち、

語句の研究

●二六三ページ

5 西行法師勧めて　西行は、最晩年の文治二（一一八六）年から四年にかけて、慈円・藤原定家・藤原家隆・寂蓮・藤原隆信や都の新進気鋭の歌人たち、伊勢神宮の神官たちに、伊勢神宮に奉納する目的で百首歌を詠ませた。これを「二見浦百首」（または「御裳濯百首」「伊勢百首」とも）という。なぜ仏教者の西行が、伊勢神宮に奉納させたのか、という疑問が当然起こり得るが、それにはまず当時の神仏習合思想を知る必要が

「美しいものは何もないのだなあ。」という意味になる。本来四季の和歌とは、美しく心惹かれる景物を詠むものである。それが「ない」とは、どういうことか。ここに、意欲満々たる青年定家の、歌人としての客気を見ることができる。そういう大胆無類の表現によって、何を表そうとしたかについては諸説がある。だから、発問によってさまざまな答えが返ってきたとしても、一概にそれを否定せず、それだけさまざまな解釈を許容してきた、難解で含みの多い表現であることを理解させたい。まとめると、①花も紅葉も問題にならないほど美しい。②花も紅葉もないが、それがかえって趣深い。③花も紅葉もない、そのように万物は虚無である、などとなる（「新古今和歌集全評釈」）。そうした諸説があるものの、やはり穏当な解釈は、②であると思われる。助動詞「けり」は、この場合詠嘆などと言われるが、詠嘆でも過去でも通底するのは、「今まで気づかなかったけれども、実は…だったのだなあ」という、気づきの助動詞としての性格である。「浦」すなわち海辺に花や紅葉がないのは当たり前であり、それなのに今さらのように気づくということは、それまでその海岸の風景に、我知らず心惹かれていたことを示すのだろう。わびしげな風景に「あはれ」を感知していたのである。花や紅葉が美しい、といえば、それは言葉だけだろう、と言われかねない。だが、「ない」と断じることによって、かえってありありと花や紅葉のリアリティが甦る。なぜなら、そういう美しいものを求めざるを得ない情念が、そのリアリティを支えるからである。所詮「美しさ」とは、それを求める人の心に宿るものだから。定家はこうした大胆な否定表現をしばしば用い、非在の美を浮かび上がらせた。そうやって浮かんだイメージを残しつつ、そういったものが一切ない風景のわびしさを述べている。

問　この歌とともに、次にあげた二首を総称して、一般的に何と言うか、答えよ。

さびしさはその色としもなかりけり真木立つ山の秋の夕暮れ（寂蓮）
心なき身にもあはれは知られけり鴫立つ沢の秋の夕暮れ（西行）

答　三夕の歌

問　この歌とともに、「三夕の歌」と総称される他の二首と、その作者名を答えよ。

答　前問、鑑賞参照。

ある。それは、本来は手の届かない崇高な仏（本地仏）が、日本人に分かりやすい形で姿を現してくれたのが神（垂迹神）であり、仏と神を一体のものとする考えだが、伊勢神宮の本地仏は真言宗で最も中心となる仏、大日如来であった。西行は、高野山に長年住んでいたことからも察せられるように、真言宗を中心に諸宗を修めたらしい。そして特に晩年になって、伊勢神宮とのかかわりを積極的に深めていったようである。後には歌界の指導者となる藤原定家も、このときはまだ二十五歳の青年にすぎなかった。憧れの先達西行のお声かりに、彼はさまざまな意欲作を作って応えようとした。

6 浦の苫屋　「苫屋」は、苫（スゲ・カヤなどで編んだもの）で屋根などを覆った粗末な小屋で、漁師らの小屋を指す。通常この歌は、海辺に苫屋が点在する風景を描いたもの、と鑑賞されることが多い。しかし、大事なのは、作者がその苫屋に宿っている事実である。もちろんこの場合の作者は藤原定家その人ではない。訳あって都を離れ、海浜をさすらっている人物である。例えばそれは、須磨・明石にさすらう光源氏などがふさわしい。古来この歌は、「源氏物語」

明石巻の、「はるばると、物のとどこほりなき海づらなるに、なかなか春秋の花・紅葉のさかりなるよりは、ただそこはかとなう繁れる陰どものなまめかしきに」の部分の影響があると言われている。かつて都で見た花や紅葉のような華麗なものは、何一つここにはない、とこの人物は嘆く。しかしまた、そういう流離の憂いをまとわりつかせながら、この海辺の夕暮れの光景は、かえってひとしお哀れに胸を締めつけてくるではないか。なぜそういう解釈になるかというと、これが西行の勧進した百首でのように、歌ということが根拠となる。西行自身にも苦屋に宿る歌はあるが、西行が追慕した能因の旅の歌に、「世の中はかくても経けり象潟や海人の苦屋をわが宿にして」（「後拾遺和歌集」羇旅）とある。定家の一首も、そういう流離する旅人の見た風景なのだ。

作者

藤原定家

名はしばしば「ていか」と音読される。応保二（一一六二）年～仁治二（一二四一）年。藤原俊成男。九条家の恩顧を受けつつ、和歌の新風を起こし、後鳥羽院に認められて、歌界をリードする存在となった。本歌取り技法の完成者で、巧緻・華麗な表現では、和歌史随一。「新古今和歌集」の撰者の一人となり、「新勅撰和歌集」の単独撰者となる。家集に「拾遺愚草」、歌論に「近代秀歌」「詠歌大概」、秀歌選に「小倉百人一首」、擬古物語に「松浦宮物語」、日記に「明月記」など、多数の著作があり、古典の書写や校訂にも多くの業績を残した。

鑑賞

特別何の指示もせず、この歌を絵にしてみるという課題を出したとして、その絵に、人の姿を描こうとする生徒は、いったいどれほどいるだろうか。「見渡せば」とあるように、花も紅葉もない景を目にしている主体が間違いなくいるはずなのに（この歌の場合、あるいは「なかりけり」にも引きずられてしまうかもしれないが）、我々は特殊な景ばかりに着目して、この主体の存在を忘れてしまいそうになる。そういうわけだから、「花も紅葉もなかりけり」と詠嘆する主体は、いったいどこからどのような気持ちで、その景を見つめているのか、という発問はさらなる難題になる。絵に人の姿を描く発想のない生徒には、「苦屋の秋の夕暮れ」を、「苦屋から見る秋の夕暮れ」とは解釈できそうにないからである。

おそらくこの歌の解釈にあたっては、海辺にいればこそ最初から眼前にないはずの花や紅葉を持ち出してきて、わざわざ「なかりけり」と嘆じるような主体とはどのような人なのか、という問いがむしろ先に立つべきなのである。西行の勧進した百首であるという詠歌事情（語句の研究参照）は、主体が流離する旅人であることに思い至る重要な材料になるだろう。

この歌は、「新古今和歌集」巻四の中の、「秋の夕暮れ」を詠んだ三首の名歌、いわゆる「三夕」の和歌のうちの一首でもある。他の二首は、

さびしさはその色としもなかりけり真木立つ山の秋の夕暮れ
（寂蓮）

心なき身にもあはれは知られけり鴫立つ沢の秋の夕暮れ（西行）。

であるが、各々によって立ち上げられる夕暮れの景の鑑賞よりも、その景の前に立つ人とその景との関係こそが、むしろ教室で問われるべき課題であるようにも思われてくる。

品詞分解と現代語訳

（表示は略号で示した。略号については略号一覧参照。）

摂政太政大臣家歌合に、湖上の冬の月　藤原家隆

摂政（せっしょう）太政大臣家歌合（だいじょうだいじんけうたあはせ）　格助・時間
に、　格助・体修
湖上（こしやう）　格助・体修
の　格助・体修
冬（ふゆ）　格助・体修
の　格助・体修
月（つき）

志賀（しが）　格助・体修
の　間助・詠嘆　カ四・体
浦（うら）　格助・起点
や　ラ四・用　接助・単接
遠（とほ）ざかりゆく　ダ下二・体
波間（なみま）　格助・体修
より　格助・体修
凍（こほ）り　格助・体修
て　接助・単接
出（い）づる　格助・体修
有明（ありあけ）　格助・体修
の　格助・体修
月（つき）

（巻六・冬・六三九）

摂政太政大臣家の歌合のときに、「湖上冬月」（という題で詠んだ歌）

志賀の浦の、（水際から凍ってしだいに）遠ざかってゆく波の間から、凍りつい（たような冴えた光を放っ）て上ってくる有明の月よ。

《**主題**》

冬の夜、琵琶湖の湖面から、凍りついたような冴えた光を放って上ってきた有明の月を見つめた歌。

指導上の注意点と発問例

●二六三ページ

問　**「波」が「遠ざか」（8行目）ってゆくのはなぜか。**

答　夜が更けるにつれて寒気が強まり、水際から凍ってゆくので。

補　「後拾遺和歌集」に収められた快覚法師（かいかくほうし）の本歌、「さ夜ふくるままにみぎはや凍るらむ遠ざかりゆく志賀の浦波」に依拠した表

語句の研究

●二六三ページ

7 摂政太政大臣家歌合　摂政太政大臣は、藤原良経（よしつね）のこと。良経は後法性寺関白兼実の次男。慈円は叔父。「新古今和歌集」には、西行・慈円について第三位の入集数。新古今時代の中心歌人の一人で、自身も歌に天与の才を発揮しつつ、定家ら新風歌人のパトロン的存在でもあった。彼の主催した歌合は「六百番歌合」など多数あるが、この「摂政太政大臣家歌合」もその一つで、正治（しょうじ）元（じ）（一二九九）年冬に、左大臣だった良経の家で催された。良経・兼実・定家・家隆・隆信・寂蓮らが参加したことが分かっているが、歌合本文は現存しない。歌題は「寒樹交松」「池上半氷」など、全て冬にちなむ四字題であった。

7 湖上の冬の月　「湖上冬月」という四字題。湖の上に冬の月が掛かっているさまを詠む。こういう、制約の多い題を出されて、どのように発想していくかが問題となる。まず、湖をどこの湖とするかを決めないといけない。その湖上に冬の月が出るわけだが、秋でも春でもなく、いかにも冬らしい月を描出する必要がある。そして何よりも難問な

現であるから、これに従って解釈すればよい。快覚の一首は「夜が更けるにつれて、波の音が次第に小さくなってゆく、あれは琵琶湖の志賀の浦の水際から凍っているのだろうか。」と想像した歌である。琵琶湖の深夜の結氷を、音で表すという、意表を突いた発想が主眼。だが奇想だけがこの歌の持ち味ではない。しんしんと更けてゆく夜、その中で心を澄ませて一人波音に聞き入っている人物が浮かび上がるのである。快覚は琵琶湖に程近い三井寺の僧だから、これは彼の実体験から生まれた歌かもしれない。一方の家隆の歌は、その発想をそっくり受け継ぎつつ、これを視覚的なものとした。もちろん音はそのままに。いくら広い琵琶湖でも、月が湖面の波間から出ることはあるまい。やはり山の端から出るだろう。だからこれは幻想的な光景である。そして茫々と広がる琵琶湖の空間の気分をも醸し出すのである。

問　**この歌の情景として、適切なものを次の中から選べ。**

(ア)寒々とした湖の静けさ。
(イ)暗くよどんだ月の光。
(ウ)湖上の月の冴えた明るさ。
(エ)凍りついた湖面の不気味さ。

答　(ウ)

問　**この歌の本歌「さ夜ふくるままにみぎはや凍るらむ遠ざかりゆく志賀の浦波」とを比較し表現の違いを説明せよ。**

答　水際の氷が張り広がるにつれ、波が沖のほうへと退いてゆくという光景を本歌から借用してはいるが、本歌にはない「月」を湖上に配することによって、寒く暗い湖に、冴えて澄んだ明るさを付け加えて、歌の世界を広げている。

問　**前の問を踏まえて、「新古今和歌集」で多く見られる本歌取りという技法の効果についてまとめなさい。**

答　この歌は本歌にはない内容を歌い上げている（前問の答参照）。つまり、本歌取りは、単なる古歌の模倣ではなく、古歌に描かれた世界を踏まえながら、さらにその上に独自の世界を構築し、作品に厚みを持たせるという効果を狙った方法なのである。

のは、その湖と冬月を、どうやって必然的に結び付けるか、である。ただ某湖の上に冬の月が出ましたと詠んだのでは、題そのままで、何の工夫もない駄作になってしまう。某湖らしさと、冬月らしさをどう掛け合わせて表現するか、である。これは難しい。家隆は、その難問に、本歌取りという武器で立ち向かった。つまり、琵琶湖の厳しい冬の情景を表現するのに、本歌の手を借りたのである。

8志賀の浦　琵琶湖の西岸、滋賀郡志賀町のあたりの浦。志賀の地は現在の滋賀県大津市及び滋賀郡で、大津宮が置かれた旧都で、地理的特徴から、津・浦・波・山などとも詠まれて、院政期以降急増し、『新古今和歌集』の時代にピークを迎える。「志賀浦」として「最勝四天王院障子和歌」や「建保名所百首」にも出題された。

8や　間投助詞。こうした「や」は、和歌に特徴的に見られる、連体修飾格の「の」に代えて用いるものである。したがって、「の」と現代語訳するとぴったり当てはまる。「我が心慰めかねつ更級や姨捨山に照る月を見て」の「や」も同じ。「や」の上の体言でまず大きな空間を提示し、ついで

より小さな場所を提示する用法である。もとより「の」と全く同じというわけではなく、「や」でいったん小休止が与えられ、そこに詠嘆がこもる。大きな空間に心が開放されていくような悠揚迫らざる調べを、音読を通して身体的に確かめさせたい。

8遠ざかりゆく　「ゆく」は「しだいに…する」の意を添える補助動詞。

8凍りて出づる　月が凍ったような冷たい冴え切った光を放つのであり、それは冬の月の印象を捉えたものであるが、その原因を、凍ってゆく波間から出てくるから、という論理で上の句と結び付けた。本歌の生かし方が巧みである。

8有明の月　夜が明けても空に掛っている月のことだが、ここではまだ月の出を迎えたばかりだから、夜明けではない。夜遅くなってようやくに東から顔を見せた月、である。

捨山に照る月を見て」のような例を知ると、ここでも「の」と置き換えて、構図的に大きな空間から湖上の月に絞り込まれていくという解釈の方向性が最適であるように思われてくるのである。

ところで第四句「氷りて出づる」は、後年制詞（中世の歌道において使用を禁制している歌句）とされた。いくらでも応用が利きそうであるだけに、この後乱用されてしまったのだろうか。

作者

藤原家隆

保元三（一二五）年～嘉禎三（一二三七）年。藤原光隆男。藤原俊成の門下生で、定家とともに新風を起こし、「新古今和歌集」撰者の一人となり、定家と並称される存在となる。家集に「壬二集」（「玉吟集」とも）がある。

鑑賞

初句の間投助詞「や」の解釈の仕方で印象は大分変わってくる。詠嘆を表すと考えると、俳句における切れ字の感覚から、感動の中心があって、意味上も切れ目になるはずではないかとどうしても意識しがちになる。とはいうものの、新大系のように「志賀の浦よ。」と切ってしまうくらいなら、新全集のように「志賀の浦では」と空間としての認識を示すことで一呼吸おく、という方がすっきりしそうである。ただ、語句の研究にも示した「更科や姥

品詞分解と現代語訳

（表示は略号で示した。略号については略号一覧参照。）

式子内親王

百首歌（ひゃくしゅうた）　の　中（なか）　に、　忍（しの）ぶる　恋（こひ）　を
格助・体修　格助・場所　バ上二・体　格助・対象

玉（たま）　の　緒（を）　よ　絶（た）え　な　ば　絶（た）え　ね　ながらへ　ば　忍（しの）ぶる　こと　の　弱（よわ）り　もぞ　する
格助・体修　間助・呼掛　ヤ下二・用　完・未　接助・順仮　ヤ下二・用　完・命　ハ下二・未　接助・順仮　バ上二・体　格助・主格　ラ四・用　連語（係助・同類＋係助・強意（係））　サ変・体（結）

（巻十一・恋一・一〇三四）

百首歌の中に、「忍恋」（秘めた恋）という題を（詠んだ歌）

我が命よ、絶えてしまうのなら絶えてしまえ。（もし、このまま）生きながらえていると、（恋心を）秘めておこうとする力が弱まってしまうといけないから。

《主題》

恋心を隠しとおす苦しさに堪えきれず、いっそ死んでしまいたいという恋心の極まりを詠んだ歌。

指導上の注意点と発問例

●二六四ページ

問　**「絶えなば絶えね」（2行目）について、(1)「な」「ね」をそれぞれ文法的に説明し、(2)この部分を現代語訳せよ。**

答　(1)な…完了の助動詞「ぬ」の未然形　ね…完了の助動詞「ぬ」の命令形　(2)我が命よ、絶えてしまうのなら絶えてしまえ。

問　**「忍ぶること」（4行目）が弱るとは、どのようなことか。**

答　秘めていた恋心があらわになり、人に知られてしまうということ。

補　「忍ぶる」は、「堪え忍ぶ、こらえる」の意の上二段動詞「忍ぶ」の連体形。恋心を人に知られないよう、心の中に秘めて堪え忍ぶことを表す。その力が弱まるのだから、当然、相手やそのほかの人にも知られてしまうことになる。世間の人に対してだけならともかく、どうして相手にもそこまで秘密にしなくてはならないのか。しばしばそれは、式子内親王が賀茂斎院であったこと

語句の研究

●二六四ページ

1百首歌　百首歌とは、一人または複数で百首を単位として詠んだもの。個人で詠むものは、社寺への奉納や練習を目的として行われることが多かった。多くの場合、前もって決めた題にもとづく題詠による。ただ、ここでの「百首歌」は何の百首か、不明。式子内親王の家集「式子内親王集」は主として三種類の百首から成っているが、これはその中にではなく、家集末尾の、「勅撰

と結び付けて解釈され、謡曲「定家」など、その恋の相手を、藤原定家とする説も生じた。式子内親王に秘められた思い人がいたことの確かな根拠はないが、否定することもできない。ただ、なにも作者の実体験に還元しなくても、古典作品の中にも、恋の露見がすなわち破滅につながる恋愛は少なくない。式子内親王自身の具体的な恋愛沙汰を踏まえるというより、そういう古典の世界に自己の情念と想像力を開放した、と見るのが穏当であろう。

問　**「もぞ」に注意して、この部分を現代語訳せよ。**

答　恋心を秘めておこうとする力が弱まってしまうといけないから。（ずっと耐え忍んできた恋心が、耐えきれずに表に出てしまってはいけないから。）

に入るといへども家集に見えざる歌」の部に入っている。それゆえ、作者が何歳頃に詠んだかなども、判然としない。

1 忍ぶる恋　「忍恋」の題詠であることを表す。本書では「忍ぶる恋」と読んだが、「忍ぶ恋」と読むこともできる。前者なら「忍ぶ」を上二段動詞としたのであり、後者なら四段動詞として訓じたことになる。「こらえる、隠す」意の「忍ぶ」は本来上二段動詞で、「偲ぶ」（本来四段活用）との混同から、平安時代になって四段活用も現れるようになった。したがって「忍ぶる」と訓じるのが本来ということになる。「忍恋」は、相手に恋心を打ち明けられず煩悶する内容を詠む題であり、恋の初期段階を示す。つまり、恋しい相手に「忍ぶ」のであって、相愛の男女が世間にひた隠しにしているのではない。現代でいえば、「片思い」に近いだろうか。

2 玉の緒よ　「玉の緒」は、本来宝玉を貫き通す緒のこと。「玉」が「魂（たま）」に通じるところから、霊魂が身体から離れないようにつなぎ留めておくもの、すなわち命の意に転じた。また、「玉の緒の」の形で、「絶ゆ」「長し」「短し」「乱る」などに掛かる枕詞として万葉時代から用いられてきた。そうした用法も取り入れながら、二句以下の縁語を導き出している。ここで切れ、初句切れとなるが、この初句切れの呼びかけは、きわめて大胆な表現と言い得る。

2 絶えなば絶えね　「絶え」は「玉の緒」の縁語。「な」も「ね」も完了の助動詞で、前者は未然形、後者は命令形。「絶えてしまうのならば、絶えてしまってくれ」と我が命に呼びかける形をとる。自分の力ではどうしようもなくなった恋心の高まりが感じられる。

2 ながらへば　「ながらへ」は「ながらふ」の未然形で、「ば」は順接仮定条件の接続助詞である。確定条件と間違えないように注意が必要。「絶えなば」「ながらへば」と一首中に二つの仮定条件が入るのは、破格と言い得る。もしこうなったら、もしああなったら、とうねるように乱れる心が、言葉の形にも実現している。「ながらふ」は「玉の緒」の縁語。

2 もぞ　「も」も「ぞ」も係助詞。将来起こり得る困った事態を想定して、「…すると いけない」「…したら困る」と、それを心配する気持ちを表す。

作者

式子内親王

「しきしないしんのう」とも。久安五（一一四九）年～建仁元（一二〇一）年。生年は比較的近年に判明した。後白河院第三皇女で、以仁王・守覚法親王らと同腹。平治元（一一五九）年賀茂斎院となり、嘉応元（一一六九）年退下。藤原俊成の指導を受け、「古来風体抄」を献呈される。巧緻な表現を得意としつつも、高貴な人らしいのびやかさがある。「新古今和歌集」随一の女流歌人。家集に「式子内親王集」がある。

鑑賞

秘めた恋心が露見するくらいなら、いっそ死んでしまいたい、とは、ずいぶんと衝撃的である。初句は呼び掛け、二句に仮定＋命令、三句に仮定、五句に懸念と、一首の内に普通の叙述がほとんどなく、初句と二句で連続して句が切れていくことなど、表現にも尋常ならざるところがあり（渡部泰明「和歌とは何か」）、切実さを印象づけている。そのほとばしる感情を表す言葉たちには、「絶え」「ながらへ」「弱り」がすべて「緒＝糸」の縁語となるように、さしづめ運命の糸にからめ取られるようにして、しっかりと真に迫る必然性が与えられているのである。

ただ、『新古今和歌集』の詞書を信じるなら、題詠歌である以上、一首に詠まれているのは虚構の恋である。しかも、「忍恋」題は一般には求愛をする男性の状況を詠むものであるから、後藤祥子（「女流による男歌」）が明らかにしたように、ここでの主体も男性であるとするのが自然だと考えられている。そのように、題詠においては、男性作者が女性の立場で、女性作者が男性の立場で詠むということも、それほど不思議ではないのである。

斎院を務めた女性は生涯独身を貫くことも多く、式子内親王もまた、制約の多い人生を送ったことは想像に難くない。しかし、たとえば題詠というある種の設定による歌のなかでは、自由に別の人格を生きることもできたはずである。彼女によって詠まれた想像の世界の恋のうちにという意味でなら、そこにあるいは謡曲「定家」に語られるような恋があったとしても少しもおかしくはないのである。

品詞分解と現代語訳

（表示は略号で示した。略号については略号一覧参照。）

東（あづま）の　方（かた）へ　修行（しゆぎやう）し　侍（はべ）り　けるに、　富士（ふじ）の山（やま）を　詠（よ）める　西行（さいぎやう）

格助・体修　格助・方向　サ変・用　補動・ラ変・用（丁）撰者↓読者　過・体　格助・時間　格助・対象　マ四・已　完・体

風（かぜ）に　なびく　富士（ふじ）の　煙（けぶり）の　空（そら）に　消え　て　ゆく　へ　も　知ら　ぬ　わ

格助・理由　カ四・体　格助・体修　格助・主格　格助・帰着　ヤ下二・用　接助・単接　係助・同類　ラ四・未　打・体　代

が　思ひ（おも）　かな　（巻十七・雑中・一六一五）

格助・体修　終助・詠嘆

東国の方へ修行で参りましたときに、富士の山を詠んだ（歌）
風に吹かれてなびく富士山の煙が空の彼方に消えてゆくように、行方も分からない私の思いであることだよ。

《主題》

風に消えてゆく富士山の噴煙に、漂泊する自らの思いを重ねた歌。

指導上の注意点と発問例

●二六四ページ

問 **「風になびく富士の煙」（4行目）は「わが思ひ」のどのような例えになっているのか。**

答 いつまでも、そして何処までもさまよい続ける情念を象徴している。

補 「わが思ひ」を「空に消えて」を根拠に、儚く消えてしまうものというイメージのみでは捉えないでほしい。「新大系」が「無心に大空へ解き放たれた心」だと説明しているように、おそらくは老境にあっても依然としてくすぶり続ける思いの形象としての性質をこそ認めるべきであろう。そして、そうした意味で捉えたときに「思ひ」の「火」などという掛詞が、この一首においても活きることになるのではないかと考えたい。

問 **古典において富士山はどのような山と捉えられているか。**

答 噴煙を上げる火山。

問 **この歌が富士山を詠んだ歌として、それまでの多くのものと比べて特殊であるのはどのような点か。**

答 都の人々と異なり、西行が実際に富士山を

語句の研究

●二六四ページ

4 風になびく富士の煙の空に消えて 「風に吹かれてなびく富士山の煙が空に消えて（その行方も分からないように）」。古典和歌における富士はしばしばその火山活動のさまを詠まれているが、西行のように実際に東国へと旅をし、自分の目で見た富士を歌に詠む機会を得られた者は決して多くなかった。そして西行自身、この歌を自信作と考えていたのか、「わが第一の自嘆哥」と語ったという（慈円「拾玉集」第五）。

見て詠んでいる点。

問 **和歌において「ゆくへも知らぬ」ものとして詠まれるのは多くの場合、どのようなことか。**

答 先行きの見えない恋の状況。

問 **「新古今和歌集」の歌集の表現の特徴をまとめなさい。**

答 洗練を極めた題材・用語を用い、余情に富んだ象徴的な表現として生かされている。感覚的な優美さ（艶）や突き詰めた閑寂味が好まれた。調べは七五調で、初句切れ・三句切れ・体言止めが多い。特に注目すべき技法は本歌取りである。摂取した古典に敬意を払い、作品として新たに再生させるかの如きその技法は、多くの歌人たちの切磋琢磨によって高められていった。その結晶こそ「新古今和歌集」の達成に他ならない。

作者

西行

元永元（一一一八）年～建久元（一一九〇）年。歌人。俗名佐藤義清。法名円位。佐藤康清男。若くして鳥羽院の北面の武士になったが、保延六（一一四〇）年、二十三歳で出家。高野山などに草庵を構える一方、伊勢、熊野、吉野など諸国を修行し、現実感あふれる多くの和歌を残した。家集に「山家集」「山家心中集」「聞書集」など

ここまでの上の句全体が、「ゆくへも知らぬ」を起こす、いわゆる有心の序になっている。

4 ゆくへも知らぬ　「行方も分からない」。この歌は、「西行上人集」では恋の部に収められている。確かに「新古今和歌集」に見える曽禰好忠の「由良の門を渡る舟人梶を絶えゆくへも知らぬ恋の道かな」（巻十一―一〇七一）のように、「ゆくへも知らぬ」という言葉続きは、先行きの見えない恋の状況を思い起こさせやすいものだろう。仏道修行を題材とする歌においても随所に恋歌的な発想や表現が目に付くのは、実は西行の歌の特質でもある。風に吹かれた煙が何処へともなく消えていく様子は、出家した後も修行の旅を続け、人の心と世の在り方の転変に常に思いを馳せ続けた彼自身の姿に擬せられたものであったのかもしれない。

4 わが思ひかな　「私の思いであることよ」。「かな」は詠嘆を表す終助詞。「思ひ」の「ひ」には上の句の「煙」の縁語「火」が掛けられている。そのような尽きることのない情熱の火を抱えた「思ひ」がどのようなものであったのかについて、やはり軽々しく限定などできないのだが、ひとまず「人間の生そのものに対する情念」（久保田淳「新古今和歌集全評釈」）といった理解に従っておきたい。

鑑賞

慈円は、文治六（一一九〇）年二月十六日の西行の死に際し、

願わくは花の下にて春死なんその如月の望月の頃

があり、自歌合に、「御裳濯河歌合」「宮河歌合」がある。「西行上人談抄」はその歌論を記したもの。「新古今和歌集」入集数第一位。

（※『拾玉集』では第三句「我死なん」）を引き、西行が本当に歌の通りに亡くなったことを「世にもあはれがりけり」と記したのに続けて当該歌を示し、これは「この二三年の程に」詠んだもので、「これぞわが第一の自嘆哥（自信作）」と語ったと述べている。『新古今和歌集』の詞書には「東の方へ修行し」とあるが、西行は文治二年に、平泉の藤原秀衡に東大寺大仏復興のための寄進を願い出る旅に出ており、この際に富士を目にしているとすれば時期的にも符合するから、確かに晩年の作ではあるのだろう。

しかし、西行を尊崇する人々の感慨はどうあれ、当該歌は老境の諦念を詠んだものでも辞世の類でもないのではないか。先行きの分からない恋の状況に用いられることの多い「ゆくへも知らぬ」という言葉続きは、いかなる状況におかれても、恋する人の心は抑制し難いものであることを示唆する。老境においてなお、富士から煙が絶え間なく立ちのぼるように、なにものかを探し追い求めようとする「思ひ」の火が、依然として自らの内に抱え込まれていることをあらためて確かめているような一首であると思われるのである。

俳諧

出典

▼底本　松尾芭蕉の作品は、日本古典文学大系「芭蕉句集」（大谷篤蔵・中村俊定校注、昭和三十七〔一九六二〕年、岩波書店）、与謝蕪村・小林一茶の作品は、同大系「蕪村集・一茶集」（暉峻康隆・川島つゆ校注、昭和三十四〔一九五九〕年、岩波書店）によった。表記などについては教科書としての統一した体裁に改めた。

参考文献

❊ **教師用**

▽**芭蕉に関するもの**

「芭蕉―その鑑賞と批評―」　山本健吉　新潮社　昭三十二
日本古典文学大系「芭蕉句集」　大谷篤蔵他　岩波書店　昭三十七
日本古典文学全集「松尾芭蕉集」　井本農一他　小学館　昭四十七
鑑賞日本古典文学「芭蕉」　井本農一他　角川書店　昭五十七
鑑賞日本の古典「芭蕉集」　井本農一　尚学図書　昭五十七
新潮日本古典集成「芭蕉句集」　今栄蔵　新潮社　昭五十七
「総合芭蕉事典」　栗山理一他　雄山閣出版　昭五十七
「芭蕉講座　一～五」　有精堂　昭五十七～六十
諸注評釈「新芭蕉俳句大成」　堀切実他　明治書院　平二十六

▽**蕪村・一茶に関するもの**

日本古典文学大系「蕪村集・一茶集」　暉峻康隆他　岩波書店　昭三十四
古典俳文学大系「一茶集」　丸山一彦他　集英社　昭四十五
古典俳文学大系「蕪村集」　大谷篤蔵他　集英社　昭四十七
新編日本古典文学全集「近世俳句俳文集」　雲英末雄他　小学館　平十三
「一茶秀句選」　丸山一彦　評論社　昭五十
鑑賞日本古典文学「蕪村・一茶」　清水孝之他　角川書店　昭五十一
新潮日本古典集成「与謝蕪村集」　清水孝之　新潮社　昭五十四
鑑賞日本の古典「蕪村集」　村松友次　尚学図書　昭五十六
日本の作家「人生の悲哀小林一茶」　黄色瑞華　新典社　昭五十八
「蕪村事典」　松尾靖秋他　桜楓社　平二
「一茶大事典」　矢羽勝幸　大修館書店　平五
日本の作家「戯遊の俳人与謝蕪村」　山下一海　新典社　昭六十一
日本の文学・古典編「蕪村集・一茶集」　揖斐高

ほるぷ出版　昭六十一

▽その他

「俳句大観」麻生磯次他　明治書院　昭四十六
「鑑賞日本古典文学「俳句・俳論」」白石悌三他　角川書店　昭五十二
「俳句辞典 鑑賞」松尾靖秋他　桜楓社　昭五十六
「日本名句集成」飯田龍太他　学燈社　平三
「名歌名句大事典」久保田淳・長島弘明　明治書院　平二十四

❊生徒用

「きょうの一句　名句・秀句３６５日」（新潮文庫）村上護　新潮社　平成十七
「カラー版　芭蕉、蕪村、一茶の世界」雲英末雄　美術出版社　平十九
「おくのほそ道　芭蕉・蕪村・一茶名句集」井本農一他　小学館　平二十
「芭蕉全句集」（角川ソフィア文庫）雲英末雄他　角川学芸出版　平二十二
「蕪村句集」（角川ソフィア文庫）玉城司　角川学芸出版　平成二十三
「一茶句集」（角川ソフィア文庫）玉城司　角川学芸出版　平成二十五
「俳句のきた道　芭蕉・蕪村・一茶」（岩波ジュニア新書）藤田真一　岩波書店　令和三

図版解説　**〈発句画賛〉**

出光翁美術館蔵。江戸時代中期（十七世紀）作。一幅。松尾芭蕉（一六四―九四）筆。森川許六（一六五―一七三五）画。許六は芭蕉の門人で蕉門十哲の一人。賛は「かれえたにからすのとまりけり秋のくれ」。

⇩P276

作者

松尾芭蕉

正保元（一六四四）年～元禄七（一六九四）年。名は宗房。俳号は芭蕉、別号は桃青・釣月軒・泊船堂・風羅坊など。祖父の代まで伊賀の国柘植の郷士で、父与左衛門の時代に上野に移り住んだ。二男四女の次男。

▼略歴・業績　若くして藤堂藩伊賀上野付きの侍大将藤堂良精の嫡子良忠に仕えたが寛文六（一六六六）年、良忠が病没したため退身した。良忠は蟬吟と号し北村季吟に従って俳諧を愛好していたので、芭蕉も俳諧に親しんできたが、退身後に諸学を修めるうちに俳諧で身を立てることを志すに至ったようである。寛文十二（一六七二）年、上野の天満宮に最初の撰集「貝おほひ」を奉納し、それを携えて江戸に下り出版した。江戸では小沢卜尺・杉山杉風らの援助で宗匠としての地歩を固めたが、延宝八（一六八〇）年冬に俗を避けて深川六間堀の芭蕉庵に移った。この頃、深川の臨川庵に参禅している。

天和二（一六八二）年の歳末、江戸の大火で芭蕉庵が焼失し、甲州谷村の高山麋時宅に身を寄せ、翌年冬には再建された第二次芭蕉庵に入った。この年に蕉風の発足を示す、宝井其角撰「虚栗」が刊行されている。貞享元（一六八四）年、帰省のための「野ざらし紀行」の旅をしたが、その間、名古屋の連衆と詠んだ「冬の日」五歌仙は、蕉風開眼の記念碑的撰集となった。これ以後、他界するまでの約十年間、一所不住の念をもって旅に生き、そして充実した俳諧活動に明け暮れた。貞享四（一六八七）年八月の常陸鹿島への「鹿島紀行」の旅、十月から貞享五〔（一六八八）＝元禄元〕年四月にかけて郷里から吉野、須磨・明石などを訪れた「笈の小文」の旅、貞享五年八月名古屋より木曽路を経て江戸に帰着する「更科紀行」の旅、元禄二（一六八九）年の「奥の細道」の旅と、立て続けに旅行をした。引き続いて、伊勢・近江・伊賀・京などに滞在して、「幻住庵記」「嵯峨日記」などを草した。芭蕉の指導のもとに成立した去来・凡兆撰「猿蓑」は元禄四（一六九一）年七月に出版されたが、重厚閑雅な「さび・しをり」の句境を示している。同年冬に江戸に帰り、翌年第三次芭蕉庵に入ったが、元禄七（一六九四）年には西国への旅に出発し、その途中の大阪で病となり、十月十二日に没した。生前の六月に最晩年に追い求めた、枯淡軽快の趣の「軽み」の俳風を見せる野坡ら撰「炭俵」が出版された。

こうして芭蕉一門の達成した蕉風俳諧は、「芭蕉七部集」（冬の日・春の日・曠野・ひさご・猿蓑・炭俵・続猿蓑）と総称される代表的撰集七つに集約されている。

品詞分解と現代語訳

かれ枝（えだ）　に　烏（からす）　の　とまり　けり　秋（あき）　の　暮（くれ）
（表示は略号で示した。略号については略号一覧参照。）
格助・場所　格助・主格　ラ四・用　詠・終　格助・体修

葉の落ちた木の枝に烏がとまっている。いかにも秋の夕暮れらしい景色である。

《主題》

秋の夕暮れに、葉の落ちた枝に黒々とした烏がとまっている。その景色に、いかにも秋の夕暮れらしい気分を感じる。

指導上の注意点と発問例

●二七六ページ

問 ◉**「秋の暮」（２行目）の句が最後に置かれることで、どのような効果が生まれているか。**

答 枯れ枝と烏の取り合わせが醸し出す気分が、秋の夕暮れの気分として印象づけられる効果が生まれている。

補 語順を変えて、「秋の暮かれ枝に烏のとまりけり」としてみる。秋の夕暮れと枯れ枝に烏がとまっている景色を詠んでいる点では、もとの句と同じである。ただし、この形にすると〈秋の夕暮れに、枯れ枝に烏がとまっている〉という意味の、やや説明的な表現になる。

これに比べると、「かれ枝に烏のとまりけり秋の暮」は、「けり」が切れ字で、「とまりけり」と「秋の暮」の間に明確な「切れ」がある。「切れ」は、その下に置かれる言葉に焦点をあてる効果がある。「切れ」の後に「秋の暮」を置くことで、句の中心が秋の夕暮れにあるということが明瞭になる。

語句の研究

●二七六ページ

２かれ枝　葉の落ちた枝と、枯死した木の枝という二つの意味がある。葉の落ちた枝という意味の「かれ枝」は冬の季語である。「秋の暮」の句に「かれ枝」を詠むのは季重なりであるが、この句の眼目は「枯木寒鴉」という冬の画題を素材として「秋の暮」を詠んだ点にある。「鑑賞」参照。

２秋の暮れ　秋の夕暮れと、秋という季節の終わりという二つの意味がある。ここでは秋の夕暮れという意味でとらえる。『あら野』ではこの句を仲秋の部に収めている。

鑑賞

季語は「秋の暮」で秋。切れ字は「けり」。初出の『東日記』（延宝九〈一六八一〉年刊）では、中七は「烏のとまりたるや」であったが、『あら野』（元禄二〈一六八九〉年刊）には「烏のとまりけり」の形で収められている。

水墨画の画題に「枯木寒鴉」がある。葉の落ちた木に烏がとまっているさまを描くもので、冬の画題である。この句はこの画題

を素材として、秋の夕暮れの気分を表現している。芭蕉の弟子の許六にこの画題の水墨画があり、芭蕉は画賛としてこの句を記している（二七六ページ図版参照）。

中世の和歌では、「さびしさはその色としもなかりけり槙立つ山の秋の夕暮れ」（寂蓮）、「見渡せば花も紅葉もなかりけり裏の苫屋の秋の夕暮れ」（定家、二六三ページ）のように、秋の夕暮れは華やかさのない、寂しい気分を醸し出すものとして詠まれてきた。この句はその伝統を継承しつつ、枯れ枝と烏の取り合わせに秋の夕暮れの寂しさを見いだしている。

品詞分解と現代語訳

（表示は略号で示した。略号については略号一覧参照。）

大津（おほつ）　に　至（いた）る　道（みち）、　山路（やまぢ）　を　越（こ）え　て
格助・帰着　ラ四・体　格助・経場　ヤ下二・用　接助・単接

山路（やまぢ）　来（き）　て　何（なに）やら　ゆかし　すみれ草（ぐさ）
カ変・用　接助・単接　副　形シク・終

山路を歩いていると、ふと道の傍らにすみれの花が咲いているのを見つけた。その可憐（かれん）で美しい姿を目にすると、私の心は何とはなしに引き付けられて、つい立ち止まって見入ってしまったことだ。

《**主題**》

山道の傍らに咲いているすみれ草の可憐さを詠む。

指導上の注意点と発問例

●二七六ページ

問　**「何やらゆかし」（3行目）は、作者のどのような気持ちを表しているか。**

答　理屈ではなく、感覚的にすみれの花に魅了された気持ちを表す。どこでもそういう気持ちになるのではなく、「山路」だからである。初案は日本武尊の魂が白鳥と化して舞い降りた地である、熱田（あつた）の白鳥山（しらとりやま）で詠まれた。御陵のすみれ草をゆかしく思う気持ちは、日本武尊への畏敬の念から発したものだろうが、「何やらゆかしすみれ草」という思いが普遍的との思いに至った時、「山路」が最適と考えたのである。

鑑賞

季語は「すみれ草」で春。貞享二（一六八五）年三月、作者四十二歳の作。「野ざらし紀行」所収。山口素堂が「山路きてのすみれ、道ばたのむくげこそ、この吟行の秀逸なるべけれ」と、本句を評価している（「野ざらし紀行」序）。しかし、この句の初案は「鑞箱物語」や「熱田三歌仙」所収の「何とはなしに何やらゆかしすみれ草」であるが、詠まれた場所は大津に至る道ではなく、尾張の国熱田（愛知県名古屋市熱田区）の白鳥山法持寺（ほうじじ）なのである。つまり、貞享二年三月下旬に大津から江戸に下る途次、熱田に立ち寄り、同地で三月二十七日に蕉門の俳人と三吟歌仙を巻いた。その折の発句が初案の形だったのである。それを初五を「山路来

語句の研究

●二七六ページ

3大津に至る道…　「野ざらし紀行」の前書き。「野ざらし紀行」の旅で、京都の山科辺から山を越えて大津に出たのである。「大津」は現在の滋賀県大津市。

て」に変えて、京都から大津に下る山路の折の吟に変更した。「山路」の「すみれ」は伝統的な和歌・連歌の世界ではあまり詠まれない取り合わせである。このことは早く北村湖春（季吟の長男）が指摘しているが、芭蕉はそういう規範的な見方から逸脱し、新たな詩的美を求めていたし、また、その点にこそ俳諧の生命を見出していた。山路の途中に、可憐で美しいすみれを見出し、人を引き付けずにはおかない花の姿を詠出したのである。

品詞分解と現代語訳

（表示は略号で示した。略号については略号一覧参照。）

旅に　病ん　で　夢は　枯野を　かけめぐる
格助・場所　マ四・用（撥音）　接助・単接　係助・区別　格助・経場　ラ四・終

旅先で病に伏している。その夜々の夢に、寒々と枯れ果てた野末を旅行く自分の姿を見ることだ。

病中吟

《主題》

旅中に病気をして、なお旅する夢を見る自己を詠む。

指導上の注意点と発問例

●二七六ページ

問 **「夢は枯野をかけめぐる」（6行目）とあるが、作者のどのような心境が感じられるか。**

答 旅への強い欲望。

補 病中の夢うつつの幻に、枯れ野をさまよい歩く自分の姿を見たことを、風雅への妄執として捉えている。

語句の研究

●二七六ページ

5病中吟　元禄七（一六九四）年十月八日、旅先の難波（現在の大阪市の古称）で病中に詠んだ句。四日後に没し、最後の句となった。

6旅に病んで　この「旅」は、元禄七（一六九四）年五月、江戸を立って伊賀上野に帰った後、湖南・京・伊賀の間を往復し、九月八日、伊賀を立って重陽の節句を奈良で迎え、その日のうちに大坂に入ったもので、実体のあまりない「旅」である。江戸での送別のさまを記した「陸奥衝」に、「此度は西国にわたり長崎にしばし足をとめて」とあるところを「夢は枯野を」と結び付ける解もあるが、かつて思い立った西国行きの話が、江戸を立つに当たって、口にのぼったという程度で、実際に計画されたものではないようである。また、「芭蕉翁終焉記」に、「…心細き夢のさめたるは」と言ってこの句を示し、「是さへ妄執ながら、風雅の上に死なん身の道を切に思ふ也と、悔まれし。」とある。

深夜に及んで、介抱に努めていた呑舟を召して、書き取らせたのがこの句である。

詞書も芭蕉が指示したものを書き留めたようなので、文字どおり「病中」の思いを詠んだものであって、いわゆる辞世吟ではない。しかし、芭蕉最後の作となったことは事実であり、死を予期

鑑賞

季語は「枯野」で冬。元禄七（一六九四）年十月八日、芭蕉最後の詠句。「笈日記」などに所収。芭蕉は大坂の之道宅に滞在中、九月二十九日より病の床に伏し、次第に容態は悪化し、十月八日の

した悲痛な心境が感得できるわけで、辞世の句にふさわしいと言える。「笈日記」によれば、この句を書き取らせた後に支考を呼んで、「なほかけ廻る夢心」という別案を示した。支考は初五文字を聞きたく思ったが、病状を考えて質問を控えていると、芭蕉は自ら「生死の転変を前におきながら、ほつ句すべきわざにもあらねど、よのつね此道を心に籠て、年もやや半百に過ぎたれば、いねては朝雲暮烟の間をかけり、さめては山水野鳥の声におどろく。是を仏の妄執といましめ給へる、ただちに今の身の上におぼえ侍る也。此後はただ生前の俳諧をわすれむとのみおもふは」と述懐している。死を目前にしながらも俳諧にひかれる我が身を嘆き、これ以後は俳諧を忘れようと返す返す悔んだというのである。

この句によって芭蕉が、迫り来る死を前にしてまで俳諧に執着し、俳諧の道の追求に欠くことができない「旅」を続けたいという意志が察せられる。それと同時に、これ以後、詠句がないことは、死を覚悟して、「妄執」から抜け出ようとする芭蕉の意志を示していると言えよう。

作者

与謝蕪村

享保元（一七一六）年～天明三（一七八三）年。俳人・画家。本姓は谷口。名は寅（または、画家としての署名にも用いている長庚を名とする説もある）。別号、宰町・宰鳥・落日庵・夜半亭・夜半翁など。画号としては、四明・子漢・長庚・春星・謝寅・三菓軒など。摂津の国東成郡毛馬村（現在の大阪府都島区毛馬町）の生まれ。家は富裕な農家と推測されるが、出自などの詳細は不明である。

▼略歴・業績　享保の末年、江戸に出て画・俳に志した。京都で俳諧活動を行っていた夜半亭早野巴人（宋阿）が元文二（一七三七）年に江戸に戻り、この巴人のもとで俳諧を修業し、宰町と号して次第に頭角を現した。寛保二（一七四二）年に師宋阿が没してからは、下総の国結城の砂岡雁宕に誘われて、結城・下館・宇都宮などの北関東地方の同門のもとに身を寄せ、その後十年間、奥州にまで足を伸ばす放浪生活の中で、画・俳を磨いた。その間に号を蕪村と改めた。

宝暦元（一七五一）年に帰京、丹後の国宮津に滞在した四年間を挟んで、明和（一七六四～一七七二）初年までは、画を専らとし俳を従とする生き方で、漢画の強い影響を脱した、与謝風と言われる独自の文人画の世界を確立した。明和年間に入ると、夜半亭門流の中で次第に中心的存在となっていき、明和三（一七六六）年には、炭太祇・黒柳召波らと三菓社を結成し、やがて同七年には夜半亭二世を継いで、中興期の京都俳壇の中心に立った。その清新で浪漫的な句風は大いに世に受け入れられ、後継者となった高井几董らのみならず、尾張の加藤暁台、金沢の堀麦水、伊勢の三浦樗良、江戸の大島蓼太など、中興俳諧の旗手たちと交流しながら、明和・安永期（一七七二～一七八一）の充実した俳壇を導いた。六十歳頃から病を訴えることが多くなるが、安永六（一七七七）年には、「春風馬堤曲」を収める「夜半楽」や句日記「新花摘」を、同九年には蕪村連句の代表作である几董との両吟歌仙「桃李」を成すなど、円熟した活動を残した。天明に入ると、やや衰えを示し、同三年十二月二十五日に六十八歳で亡くなった。遺骨は、「我も死して碑にほとりせん枯尾花」という生前の希望どおり、洛東一乗寺村の金福寺芭蕉庵牆外に納められた。蕪村一門の代表的撰集を「蕪村七部集」と総称するが、「其雪影」「明烏」「一夜四歌仙」「花鳥編」「続一夜四歌仙」「桃李」「続明烏」「五車反古」の八部を収める。

品詞分解と現代語訳

（表示は略号で示した。略号については略号一覧参照。）

春（はる）　の　海（うみ）　ひねもす　のたりのたり　かな

格助・体修　副　終助・詠嘆

春の海を眼前に眺めると、海は大きな広がりをみせているが、そこでは一日中のたりのたりと波が上下して打ち寄せている。いかにものどかである。

指導上の注意点と発問例

《主題》

春の海の春らしい穏やかさ、ゆったりとした感じを詠む。

●二七七ページ

問　「のたりのたり」（２行目）はこの句の中でどのような表現上の効果があるか。

答　「のたりのたり」という擬態語がゆるやかな音調で緩慢な波の様子を的確に表現しているが、「のたり」を繰り返すことで、ゆったりとした感じがいっそう増している。

鑑賞

季語は「春の海」で春。宝暦十二（一七六二）年以前の作。「須磨の浦にて」と前書のある撰集もある（「俳諧金花伝（はいかいきんかでん）」）ので、須磨で詠んだもの。「のたりのたり」でゆったりした様子を示すとともに、「一日中」の意の「ひねもす」という雅語表現が加わることで、春の海ののどかさ、緩慢さを表している。「のたりのたり」は、波の磯に打ち寄せる様子と見る説と、沖で波が緩慢な動きを見せている様子と見る説とがあるが、どちらとも限定せず、「春の海全体を形容したもの」（「名句集成」）と考えていい。本句には「春の海」「ひねもす」「のたりのたり」だけしか使われていないが、実際には「波」が大きく浮かんでくる表現になっている。

語句の研究

●二七七ページ

２のたりのたり　「のたり」は四段動詞「のたる」の連用形からきているもので、うねるように進む意であるが、ここにも緩慢にではあるが波が進んでいる気分が込められている。

品詞分解と現代語訳

五月雨（さみだれ）　や　大河（たいが）　を　前（まへ）　に　家二軒（いへにけん）
問助・詠嘆　格助・対象　格助・状態

五月雨が降り続き、水かさを増し濁流となってすさまじい勢いで流れる大河を前に、ただ二軒の家が不安げに寄り添うように建っている。

（表示は略号で示した。略号については略号一覧参照。）

《主題》

大河の濁流を前にして、二軒の家が不安気に寄り添っている情景を詠む。

指導上の注意点と発問例

●二七六ページ

問　◉「五月雨や」（3行目）の句は、どのような情景を描いているか。

答　五月雨が降り続いて水かさの増した大河を前に、たった二軒の家が建っている、心細さを感じさせる情景。

補　「二軒」ではなく「一軒」あるいは「三軒」だと、印象はどのように変わるだろうか。一軒では孤立している感じが強くなる。三軒では危うい感じが薄れるだろう。二軒であるからこそ、不安で心細い感じが伝わってくる。

語句の研究

●二七六ページ

3 五月雨　陰暦五月頃降り続く長雨。梅雨。季語。

鑑賞

季語は「五月雨」で夏。安永六（一七七）年五月十日、夜半亭月並句会での作。「蕪村句集」に所収。本句は兼題の一つ「五月雨」に対して詠んだものである。凄まじい五月雨によって大河が氾濫しそうな様子が見えて、川端にある二軒の家が不安気に寄り添っている情景を映し取っている。強大な力を振るう自然と、それに対峙する人間の生活という構図で、いかにも画家蕪村の目を感じさせる絵画的な句である。「家二軒」は、危難の前に弱小のものが寄り添う感じがよく出る、実に絶妙な配置で、一軒では孤立に過ぎるし、三軒ないしそれ以上では危うい感じが消えてしまうのである。同じ蕪村の五月雨の句に「五月雨や御豆（歌枕の御豆の御牧のこと）の小家の寝覚がち」（明和六年）がある。川の氾濫を危惧する人間とその生活を詠んでいることは同じであるが、迫力などの点で本句のほうが勝っていることは言うまでもあるまい。

この句はただ単に五月雨を詠んだ叙景句ではないとする説がある（新潮日本古典集成など）。五月雨の降りしきる大河を前にした人々の不安を詠んでいるが、それは蕪村自身の心象を反映して

いるというのである。蕪村の不安とは、安永五年十二月に結婚した一人娘「くの」が翌六年五月に離婚したことである。五月二十四日付の正名・春作宛の書簡で、婚家が金儲けを専らにし、家風が合わないことで娘が病気がちなことから、「金も命ありての事と不便に存じ候て、やがて取りもどし申し候。」と述べているが、その書簡中の末尾に本句が「涼しさや鐘を離るる鐘の声」などとともに書き付けられている。この二句について「右は当時流行の調にては無之候。」と注記があって、蕪村はこの当時流行の句風を叙景句と捉えているから、本句が単なる叙景を詠んでいるとは考え難く、娘の離縁と関連付けるのが妥当だと言う。確かに蕪村の心象風景を描いているという見解には説得力もある。

品詞分解と現代語訳

（表示は略号で示した。略号については略号一覧参照。）

牡丹（ぼたん）　散（ち）つ　て　うち重（かさ）なり　ぬ　二三片（にさんぺん）
ラ四・用（促音）　接助・単接　ラ四・用　完・終

絢爛豪華に咲き続けた牡丹の花も散り落ちて、その花びらの二、三枚が黒い土の上に重なっている。

《主題》

華やかな牡丹の花が散って、重なった情景を詠む。

指導上の注意点と発問例

●二七七ページ

問　「二三片」（4行目）とは、何を表すのか。

答　牡丹の花の花びら二、三枚。

補　蕪村の門人の几董（きとう）は「二三片とかたう文字を遣（つか）ふたは、題の牡丹に取り合はせし趣向なり」（「附合（つけあい）てびき蔓（づる）」）と述べ、「牡丹」という題が、硬い漢語を使うのにふさわしいことによる趣向だとしている。

語句の研究

●二七七ページ

4 散つて　「俳諧新選」などには「散て」と表記してある。ここから「散つて」か「散りて」と読むかという問題が生じる。河東碧梧桐（かわひがしへきごとう）が紹介した蕪村の几董宛書簡（安永九〔一七八〇〕年七月二十五日付）の中に「ぼたんちりて」と仮名で記されているという。この書簡自体は未確認であるが、近年は「散りて」として解する書もある（「日本名句集成」など）。ここでは従来どおり、「散つて」を採用した。

鑑賞

季語は「牡丹」で夏。安永元（一七七二）年以前の作。「俳諧新選」所収。「牡丹散つて」は「語句の研究」に記したように、読み方にも問題があるが、さらに解釈も、「牡丹がすでに散っていて」とも「牡丹が今散って」とも考えられるのである。実は解釈は読み方とも関連していて、「牡丹散つて」であれば、かなり語調が強く感じられるので、作者の目前に牡丹の花びらが散る景を詠んだと見てもよい。ところが、「牡丹散りて」となると、ややゆったりした表現となり、花びらが一ひらずつ徐々に落ちてゆき、その結果として、眼前にうち重なっている花びらがある、というように解することもできよう。

几董は「附合てびき蔓」の中でこの句について、時節を四月二十日頃、時刻を有明月のある早暁、散った牡丹の上に露などがきらきらしている状況と考えて、脇句を付けたと述べている。連句の中で脇句を付ける人物の解釈が、発句の詠者の心を正しく読み取っているとは限らないが、参考にはなるだろう。

蕪村には「牡丹切つて気のおとろひし夕べかな」など牡丹を詠んだ名句が多いが、本句はその中でも代表的な作である。

作者

小林一茶

宝暦十三（一七六三）年～文政十（一八二七）年。俳人。名は弥太郎・信之。別号、圮橋・雲外・俳諧寺など。信濃の国水内郡柏原村（現在の長野県上水内郡信濃町）の農家、弥五兵衛の長男。

▼略歴・業績　三歳のときに生母と死別、祖母の手で育つが、八歳のとき、継母が来て義弟仙六（後、弥兵衛）が生まれ、その後、家庭内に不和が絶えなかった。十五歳頃江戸に出て、住み込みの店員のような境遇に入り、苦労したようであるが、その後、約十年間の消息は分からない。天明五（一七八五）年頃から葛飾派の二六庵竹阿の門で俳諧を学んでいたらしいが、寛政二（一七九〇）年に竹阿が大坂で没すると、渭浜庵素丸の門に転じた。翌寛政三年に老父を見舞うために帰郷して「寛政三年紀行」を著し、同四年、京坂から四国・九州へ俳諧行脚をし、京の闌更、大坂の大江丸らと交渉を持ち、句帖を残した。飄逸洒脱な言行や句風をもって江戸俳壇に特異な存在として認められるようになったが、宗匠として一家をなすことなく、一茶を後援した夏目成美の家に寄食したり、房総方面に散在する門人のもとを転々するなど、放浪の境涯に生きた。

享和元（一八〇一）年、久しぶりに帰郷したとき、父が急病で亡くなったが、その枕頭に侍して、父子の情と継母・異母弟仙六との葛藤を書き綴った「父の終焉日記」を刊行している。その後、江戸に戻った一茶は、財産を一茶と仙六とで二分するようにという父の遺言を履行しない異母弟との間に長い相続争いを続けることになる。和解が成立したのは文化十（一八一三）年で、一茶五十一歳のときであった。翌年、江戸を引き払って帰郷、初めて妻帯して落ち着いた家庭の人になったが、生まれた子は次々に死亡、妻とも死別、再婚した妻とは離婚するなど、ついに世間並みの幸せというべきものを味わうことなく終わった。六十五歳の夏、火災に遭い、焼け残りの土蔵の中で、その冬十一月十九日、再度の中風の発作で没した。

一茶には、日常の見聞や活動、また特に句作などを克明に筆録する性癖があって、前記の句帖に始まり、享和・文化の頃から晩年に至る句帖は「享和句帖」「文化句帖」「七番日記」「八番日記」「九番日記」の名で刊行されている。また、これらに対して、一茶が生前に刊行を予定してまとめた唯一の句文集に「おらが春」があり、代表作として読まれている。

品詞分解と現代語訳

有明(ありあけ)　や　浅間(あさま)　の　霧(きり)　が　膳(ぜん)　を　はふ
間助・詠嘆　格助・体修　格助・主格　格助・経場　八四・終

（表示は略号で示した。略号については略号一覧参照。）

軽井沢の旅宿の早朝、有明の月が、まだ、淡く消え残っている頃、食膳についていると、浅間の山すそからわく霧が、部屋の中に煙のように流れ込んできて、食膳の辺りをはうようにしていることだ。

《主題》
旅宿の朝食の膳に霧がはい回る様子を詠む。

指導上の注意点と発問例

●二七七ページ

問 ◉「霧が膳をはふ」（6行目）とは、どのような様子か。

答 浅間山の霧が部屋の中にまで入り込み、食事の膳の周りに漂っている様子。

補 旅宿の部屋に霧が入り込むという、旅先で見た光景を詠んでいる。霧が生きもののように漂う様子を、「はふ」という動詞を使うことで的確に表現している。

問 「有明に」ではなく「有明や」とすることで、どのような効果が生まれているか。

答 「有明に」の場合は、単に「早朝に」という意味になるが、「有明や」として切れを入れることで、「有明」に焦点をあてる効果が生まれている。

補 「有明」に焦点をあて、「霧が膳をはふ」様子を、いかにも浅間山の山麓の早朝らしい光景として詠んでいる。

語句の研究

●二七七ページ

6有明や　夜が明けて空に白く見えている月を有明と言うので、ここは、夜が明けそめた早朝の光景である。なお、「有明」を有明行灯(あんどん)と解する説もあるが、一茶の句例は「有明やさらしな山も通りがけ」のように、全て有明月を指している。

6浅間　浅間山。現在の群馬県と長野県との境にある山。

6膳　朝食の膳。旅宿で、早立ちのために、早朝に食膳についているのである。

鑑賞

季語は「霧」で秋。「七番日記」所収。文化九（一八一二）年七月、作者五十歳の作。一茶の句文集「株番(かぶばん)」所収句には「軽井沢」と前書きがある。江戸と郷里とを何度か往復した一茶には、なじみになっている宿場の情景である。文化九年六月十二日に江戸を出発し、遺産問題の折衝のため約二か月柏原に滞在、そして、江戸に戻っている。往きは六月十五日、帰りは八月十四日に軽井沢を

通過している。「七番日記」には、七月の部の終わりにこの句が記されているので、往路での印象を詠んだものかと言う。

デッサンのしっかりした、的確な叙景の句である。「有明」「浅間の霧」と、やや平板に事実を提起したのを受けて、「膳をはふ」が動的な描写となっていると同時に、「有明」「浅間の霧」を生き生きした具象性を伴うイメージに活かしている。

品詞分解と現代語訳

（表示は略号で示した。略号については略号一覧参照。）

十二月二十四日、故郷に入る
　　格助・帰着　ラ四・終

これ　が　まあ　つひ　の　栖　か　雪五尺
代　格助・主格　感　格助・体修　終助・詠嘆

かねがね自分の最後の住みかと思い定めていた故郷へ帰ってきてみると、なんと五尺もの雪に深く閉ざされた世界である。見慣れている土地とはいえ、我が余生を送る土地かと思うと、感無量である。

《主題》
故郷の雪国に永住する気持ちを詠む。

指導上の注意点と発問例

●二七七ページ
問 故郷を「つひの栖」（7行目）と言っているのは、なぜか。
答 柏原は生まれ故郷とはいえ、長い間不本意な争いの対象になってしまっていたので、今回はどんなことがあっても郷里に落ち着こうという決意で帰郷した。それで「つひの栖」という表現が出たのである。

語句の研究

●二七七ページ
7十二月二十四日　文化九（一八一二）年八月に一度江戸に帰ってから、同十一月十七日、今回こそ遺産問題にけりをつけようとの決意で柏原に赴いた。十一月末に柏原に着き、約一か月間、近村を巡った後、借家を決めて腰を据えて交渉に入ろうとしたのが十二月二十四日であった。
7故郷　信濃の国柏原（現在の長野県上水内郡信濃町）のこと。
7五尺　「尺」は長さの単位。一尺は約三〇・三センチメートル。

鑑賞

季語は「雪」で冬。文化九年十二月二十四日、作者五十歳の作。「成美評句稿」所収。「七番日記」にも収めるが、前書きはなく、文化九年十一月の部に入っている。江戸の成美に送った句稿には、中七に「つひの栖か」「死所かよ」の両案が併記されており、成美は「死所かよ」を消し、「つひの栖か」に「極上々吉」という高い評価を与えている。嘆きの肉声を発したような主題の句に

あって、「死所かよ」はあまりに生の響きで、膨らみに欠けるが、伝統の歌語でもある「つひの栖」は、暗く沈んだ情調をほどよく受け止める重さがある。「『是（これ）がまあ』という嗟嘆に発し、『つひの栖か』という暗いイメージに転じ、結句を『雪五尺』と具象的に据えた格調は大きくひきしまっており、隙間がない。」（栗山理一「日本詩人選」）という評は、この句のリズムを指摘したものだが、確かに、結句の「雪五尺」と五・七の激しい主観との緊張が一句の眼目である。

品詞分解と現代語訳

（表示は略号で示した。略号については略号一覧参照。）

蛙戦ひ　見に　まかる、　四月二十日　なり　けり
上二・用　格助・目的　ラ四・終(ℐ)作者→読者　断・用　過・終

痩せ蛙　まける　な　一茶　これ　に　あり
カ下二・体　終助・禁止　格助・場所　ラ変・終

痩せ蛙よ、他の蛙との戦いに負けるな。一茶はここにいて、応援しているぞ。

《主題》

蛙同士の戦いのなかに痩せた蛙がいるのを見つけて、声援を送る。

指導上の注意点と発問例

●二七七ページ

問 **「まけるな」と口語調の表現を用いていることで、どのような効果が生まれているか。**

答 非力に見える「痩せ蛙」を応援する作者の気持ちが直接的に伝わってくる効果が生まれている。

補 この句や「これがまあつひの栖か雪五尺」（二七七ページ）の「これがまあ」のように、一茶の句では口語調の表現が効果的に用いられている。

「まけるな」は、蛙の戦いを見ながら心の中で声援を送っていると考えてもよいだろう。

鑑賞

季語は「蛙」で春。『希杖本一茶句集』では、前書きは「武蔵の国竹の塚といふに、蛙たたかひありけるに見にまかる、四月廿日なりけり」とある（『俳句大観』明治書院、一九七一年）。竹の塚は武蔵国足立郡に属する。この句は『七番日記』では文化十三年（一八一六）の部に収められているが、同年四月に一茶は信州にいた。ゆえに、「江戸流寓中の体験によった回想の句か」とする説もある（前掲『俳句大観』）。

「蛙戦ひ」は蛙いくさ、蛙合戦ともいう。蛙が交尾の時期に集まって争うさまを合戦に見立てたものである。時季は夏であり、前書きに四月（陰暦四月）とあることと符合する。「蛙」は季語としては春であるが、この句は実質的には夏の句である。

前書きに「見にまかる」とあることから、一茶はたまたま蛙の

語句の研究

●二七七ページ

9 蛙戦ひ　多くの蛙が集まり、争って交尾するさま。雌をめぐって雄同士が戦っているように見えることから、このように言う。

9 これにあり　ここにいるぞ。自分がついているぞ、と痩せ蛙に呼びかけている。

戦いを目撃したのではなく、わざわざ見に行ったと考えられる。見物しながら痩せ蛙に肩入れするところに、弱いものに寄せる思いがあらわれている。それは一茶の「我と来て遊べや親のない雀」といった句にも通じるものであろう。